

九州大学所蔵家具購入注文書及び家具購入設計図の 史料評価及びその考察

松田, 芽子
株式会社アーキディアック

堀, 賀貴
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4769750>

出版情報 : 都市・建築学研究. 39, pp.23-37, 2021-01-15. 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門
バージョン :
権利関係 :

九州大学所蔵家具購入注文書及び家具購入設計図の史料評価 及びその考察

Historical Evaluation of the Purchase Order Documents and Drawings for the Wooden Furniture in Kyushu University

松田芽子*, 堀 賀貴**
Meiko MATSUDA, Yoshiki HORI

A set of wooden and ornate custom-made furniture with which filled the rooms the main building of the faculty of engineering in Kyushu University Hakozaki campus had been custom-made in 1930. Its design contained pictorial allusions not only to western classical styles, but also to Japanese and Asian art and cultures. In the Kyushu 'Imperial' University in middle 20th century, which promoted 'well-being' of Asian studies, most notably, one has to reckon with the multi-cultural designs closely intermingled in the furniture, and they seem to produce a different atmosphere from other 'Imperial' Universities represent the most extreme examples of a wider trend of the studies in Kyushu among the cluster as a whole.

Keywords : *Kyushu university, wooden furniture, university history, detail's design, furniture history*
九州大学, 木製什器, 大学史, 細部意匠, 家具史

1 研究の概要

1.1 研究の背景と目的

九州大学箱崎キャンパス工学部本館は大正12年(1923)に火災で消失した。その再建の際、昭和5年(1930)に作成された「昭和五年 工・其他火災復旧 三千円以上」には工学部本館の特別室・会議室・応接室・食堂・講堂(のちの大講義室)の5つの部屋で使用された什器についての記録が残されている。具体的には、家具購入に際し「品質ヲ粗悪ニシ政府事業ニ支障ヲ來ス」ことがないように行われた指名競争入札に関する記録史料と、九州大学から指名人に向けた「家具購入注文書」とが中心となる。この家具購入注文書は、大学側が指名人に対し木製什器の種類(名称)・員数・材料・仕様・家具購入設計図(以下家具図とする)を指

定するためのものである。その中でも家具図は、指名人にデザインを示すために九州帝国大学によって製作されたものであり、モルディングなど細かな意匠を確認することが可能で、同時代の家具と比べ当時の潮流に沿わない特異な点も散見される。加えて、家具史研究において、このような実際の使用者による記録史料は、家具メーカーなど供給者側の史料だけではわからない家具の利用実態を明らかにするという点で大変貴重なものといえる。先行研究¹⁾において、九州大学箱崎キャンパスなどの旧校舎で使用された木製什器は個々に備品番号プレートが附されており、その番号に対応した購入時期・材料・寸法等を記した備品台帳が保存されていること、競争入札記録・建物設計図などの付随情報が九州大学大学文書館に収蔵され

* 株式会社アーキディアック

** 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門 教授

ていて調査可能であることが指摘された。このことにより、九州大学に残された史料は、供給者側の史料として十分に情報量に富んだものであると判断してよい。またこの史料が作成された昭和初期は、明治期に西洋からデザインが導入された後に現代の形へと変化していった時期であるものの、その変遷過程については未だ明らかになっていない点も多く、家具史全体から見ても貴重な史料といえる。本研究では、まず記録史料の評価を行った上で、それらの意匠を分析し、同時期の民間企業や他の旧帝大との家具意匠の比較を通じて、九州大学の木製什器の歴史的な位置付けや意匠の独自性について、その意匠を考案するに至った過程を考察することを目的とした。

1.2 研究方法

まず、研究対象となる木製什器意匠の設計意図を明らかにするため、設計に関わった者を明らかにしておく。次に当時の九州帝国大学本部家具購入注文書の家具図を元に工学部本館家具意匠を分析し、同時期の九州大学で見られる家具と比較する。そして工学部本館木製什器を製作した大阪三越が同時期に製作した個人邸宅（三河邸）の家具、大阪三越に近い民間企業（銀座・松屋）の家具とも比較する。さらに使用時期・使用目的が同じ旧帝国大学の室群（東京大学安田講堂便殿・主階控室、京都大学本部会議室、東北大学御座所、北海道大学御座所）の家具とも比較し、九州大学工学部本館木製什器の意匠の独自性を明らかにする。

2 研究対象の史料評価

指名競争入札の際に使用された家具購入注文書及び家具購入家具図の設計者は正確にはわかっておらず、当時の建築課長渡部善一の押印が確認できるのみに留まっている。家具図では部屋ごとに家具に品名がつけられており、家具意匠もそれぞれ全て異なる。そして便宜上、家具図にはそれぞれの家具に A~Y, A'~E', O' のアルファベットが振られている。

2.1 注文書の修正に関して

家具購入注文書内の仕様書には7箇所の修正があり、4箇所に渡部善一の印が押されている。修正内容としては①貴賓室→特別室、②（卓子の単位）個→脚、③家具の「金物」の材料指定、④（書類製作者）九州帝国大学 工学部→建築課、の4点である。③の仕様書の「金物」指定については、家具図においても材料を指定する描き込みがあり、「金物」、「カガミ」、「パネル」（以上図1中家具図 T,R）、「大理石」の4種類ある描き込みのうち、「金物」だけ文字サイズが大きく、右に線が引かれておらず、仕様書の追記修正に伴って、家具図にも追記されたのではないと思われる。

当時九州帝国大学工学部には建築学科がまだ設立されていなかった^{註1)}。それに対し大学本部の建築課に勤めていた技師たちは、建築課長渡部が東京帝国大学の建築学科卒であった²⁾ように、当時最先端の専門教育を受けた人材であった³⁾。しかし、木製什器の家具図は、そのような専門家が集まる建築課が描いた図面とは考えられない製図上の間違いが指摘できる。具体的には、椅子の立面図で描かれている脚部の部品

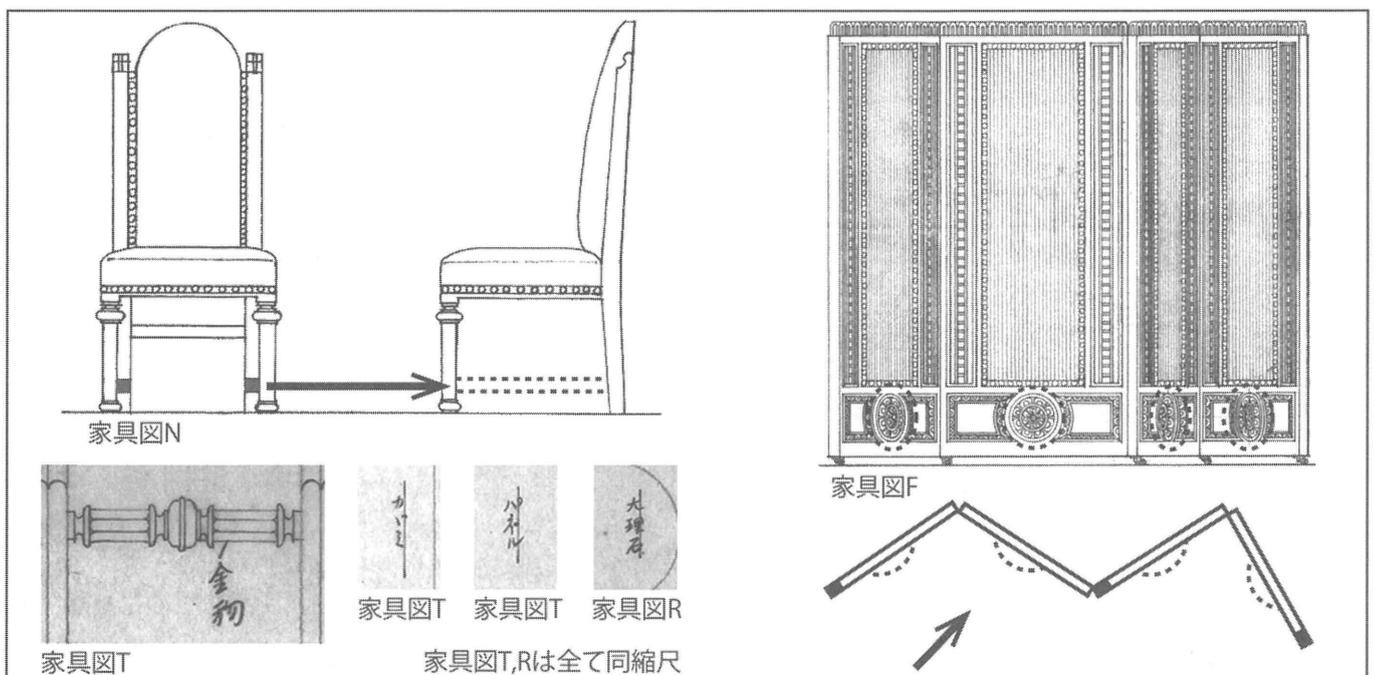


図1 家具図における材料指定追記の可能性(家具図 T,R)と製図上の間違い(家具図 N,F)

(図1中の家具図Nの灰色部分)が側面図で描かれていないこと、ベザントの描き方に規則性が見られない(特に図1中の家具図Nの背もたれ面)ことである。

中でも特に家具図F「スクリーン四枚折」という4枚の板で構成されると考えられる什器の家具図には明らかな製図上の間違いを見つけることができる。家具図Fを、描かれた小口の表現(図1中の下図黒く塗りつぶした部分)から矢印の方向から見て描いたものとする、下部の花模様は前面に立体的に膨らんでいるはずであるが、右から2番目の板の下部模様(点線円部分)の向きが間違っており凹んでいるように見える。以上のことから、家具図の製図は建築課が一貫して行なったとは考えにくい。

また家具図は寸法や縮尺の記入がなく、図面表現とスケッチ表現が入り混じった図面である^{注2)}。このような点から、出来上がった木製什器を見ながらスケッチや図面を描いた可能性がある。しかし、スクリーン四枚折の製図上の間違いは、実物を見て描けば起きない種類の間違いであり、家具図は木製什器が出来上がる前に描かれたものだと判断できる。従って本研究で取り扱う史料は入札用であると判断した。

2.2 家具図製作時の九州帝国大学建築課

次に、2.1で指摘した修正点や間違いが起こった原因について書類製作者の側面から考察する。工学部本館木製什器に関する最古の記録史料として確認されるのは昭和5年5月8日起案、木製什器を指名競争入札に関する「入札伺」である。この書類に建築課長渡部善一をはじめ、會計課長、総長、工學部長の印が確認できる。また、入札伺の本文に「本學工學部本館家具購入別紙注文書ノ通り取調候ニ付き左記理由に據り本件供給請負ヲ指名競争入札ニ附セラレ然るべきや(一部抜粋読み下し)」とあり、昭和5年5月8日に前述の家具図が提出されたと考えられる。

この時期の九州帝国大学本部建築課の人事に関して、明治44年から九州帝国大学技師となり初代建築課長を務めた倉田謙が辞任し、渡部善一に建築課長が引き継がれたということは特筆すべきだろう。倉田謙は、工学部本館の工事中に建築課員3名の不正が発覚したことにより建築課長としてその責を負い、自己便宜による依願免本官となった³⁾。不正発覚した建築課員3名はそれぞれ早い順で、昭和4年5月16日、昭和4年5月25日、昭和4年6月6日に自己便宜による依願免本官となっている。昭和4年12月27日に倉田謙が辞任し、昭和5年2月19日に渡部善一が建築課長に就任した²⁾。初めに辞任者が出てから次の建築課長が就任するまで約9ヶ月を要しており、この事件の処理が容易でなかったことが伺える。さらに建築課

が担当した新築工事物件の数は昭和5年には5件、昭和6年には6件と大正10年～昭和20年という期間の中でも多忙な時期に分類される³⁾。また、昭和5年1月1日の時点で倉田謙が48歳であったのに対し渡部善一は若干36歳であり、建築課として倉田謙の後任として関わる経験が不十分であったとも考えてよい。

2.3 倉田謙と工学部本館

渡部善一の前任の建築課長であった倉田謙は、木製什器が納められる工学部本館の設計者であった。工学部本館を「該建築構造ハ永久ノ計ヲ立テ學舎トシテ最善ノ方式ニ依リ」再建するため、当時最先端の技術であった鉄筋コンクリート造を選択。それに伴い、倉田謙は昭和2年、欧米諸国へ視察に赴き工学部本館を設計している。この事前視察は昭和2年7月15日出発、翌3年3月29日に帰朝という、約8ヶ月にわたる長期で22カ国44箇所を廻る壮大なものであった^{注3)}。

倉田謙はアメリカやイギリスなどの技術先進国だけでなく、北欧諸国から東欧まではほぼ全てのヨーロッパの都市を廻っており、更にエジプトやインド、東南アジア、中国などの国々も訪れていることも注目に値する。この視察を経た彼の趣向が工学部本館に与えた影響については別に検討すべきだが、現時点では史料が十分に揃っておらず、今後の課題としておきたい。

2.4 小結

2.1で述べた工学部本館木製什器仕様書の修正点④「(書類製作者)九州帝国大学 工學部→建築課」と、家具図の製図上の間違いが発生した原因について考察する。2.2で述べた建築課が当時大変多忙であり、さらに人事異動の直後であった事情を勘案すると、家具図の製作は建築課が工学部に委託した可能性あるのではないかと、そして建築課が確認、および細部の修正の上、受理されたものではないかと考えた。この推測によって、確証はないものの2.1で述べた4つの修正点と3つの製図上の間違いを説明することはできる。また、原案は工学部本館を設計した倉田謙が設計に関わっていた可能性は否定できない。

3 室ごとのデザインコード分析

昭和5年に大阪三越に発注した5つの室に置かれた木製什器の中で、食堂の家具デザインは簡素な構成である。2つ例を示すと、スモールチェアエアー(図2中の家具図D')にはウィンザーチェア風の背もたれと座面下部のベザントを有する。フラワースタンド(図2中の家具図E')は下からオヴォロ、フィレット、オヴォロの土台があり中央部分はベザントで飾り付けられている。また講堂の家具は講臺(図2中の家具図

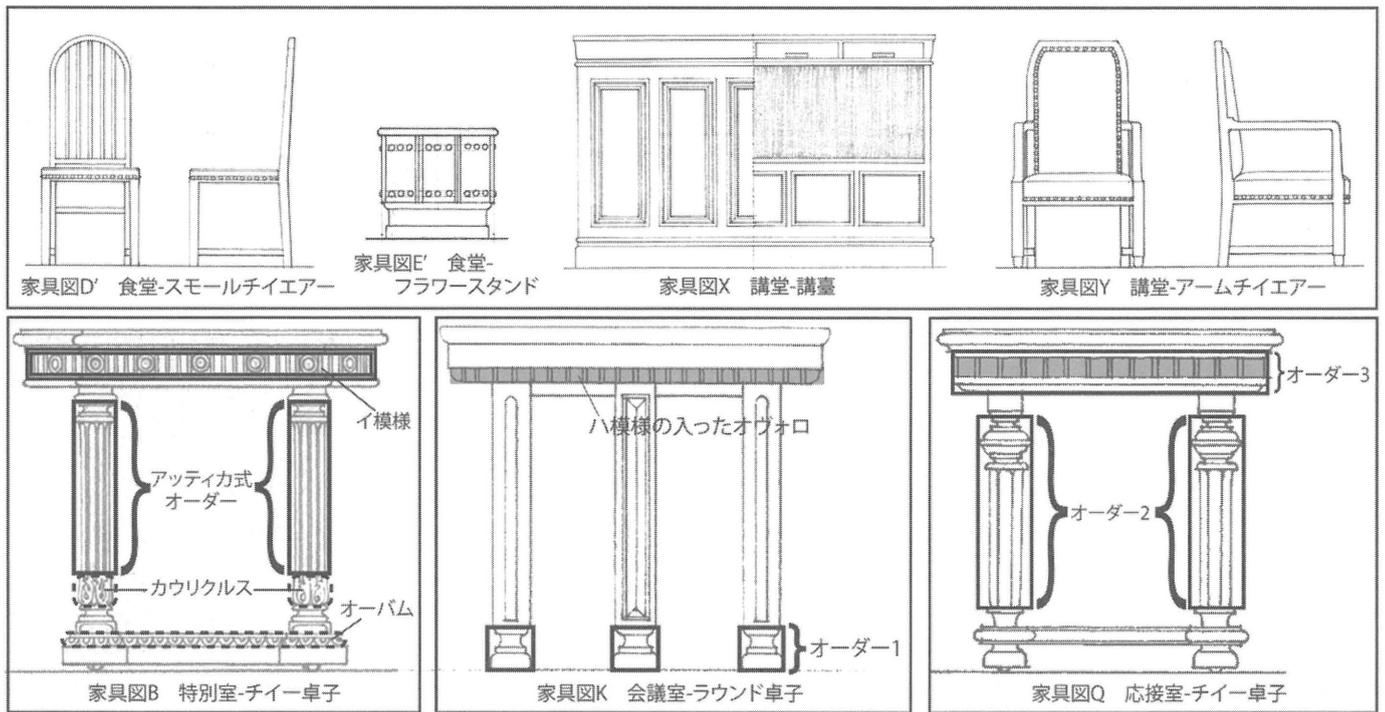


図2 室ごとのデザインコード分析

X) とアームチェア (図2中の家具図Y) の2種類しかない。それに対し特別室・会議室・応接室は室ごとの家具種類数が7~9種類あり特徴的な装飾も見られるため、この3室を対象に家具のデザイン構成について分類した。その結果、室ごとに共通して見られる特有のデザインコードの存在を確認した。以下では、室ごとの意匠分析・分類結果を示す。

3.1 特別室のデザインコード分析

特別室の家具は全9種で、そのうち5種にアッティカ式オーダーが見られる (図2中の家具図B)。またアカンサスの葉や卵鏃 (エッグ・アンド・ダート) といったコリント式装飾が5種に見られる。上記の西洋の古典的様式とは別に3種で「ロ模様」が見られる。ロ模様は、フロイロンの内側と蓮華文様の外側とを組み合わせたように見える (図3)。さらに植物装飾という点ではアール・ヌーヴォーの流れに通じる面も否定できない。

また、3種は須弥壇和様で見られる複弁蓮花を上下

逆さまにした模様を有している (図4)。

4本のトリグリフとパテラが連続する模様「イ模様」は、3本のトリグリフとパテラが連続する模様「イ'模様」とを合わせると5種類に見られる。ここでイ(イ')模様のパテラに注目したい。西洋の古典的装飾としてのパテラは通常、丸い、底の浅い皿状の装飾を指す。イ(イ')模様のパテラは正面から見ると西洋のパテラと酷似しているが、角度をつけて見ると西洋のパテラと異なり大きく飛び出しているのが確認できる (図5)。これは日本の酒杯模様という、伏せたお椀状の装飾の特徴も併せ持っているとも解釈できる。

さらにイ(イ')模様のトリグリフに注目すると、通常、西洋の古典的トリグリフは3本の縦棧を特徴とするが、特別室のイ(イ')模様の中には縦棧が4本のももあり、意図的に西洋のトリグリフと差異をつけた印象を受ける。また西洋のトリグリフは縦棧の部分が凸になっているのに対し、特別室では凹に彫り込まれている。これは日本の格子模様に通じる部分があると解釈できる。つまりイ(イ')模様は西洋のパテラ・ト



図3 ロ模様, フロイロン, 蓮華文様の比較

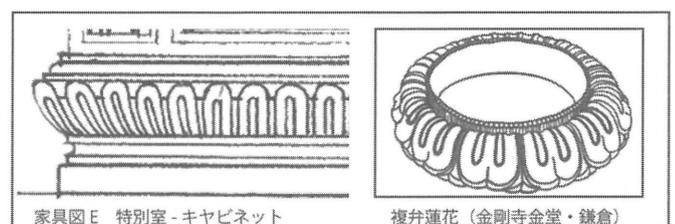


図4 家具図Eの脚部模様と複弁蓮華の比較

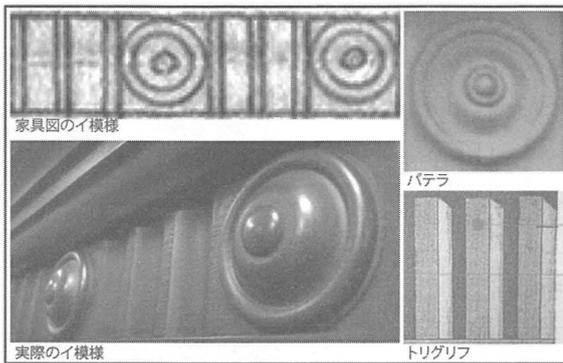


図5 イ模様、パテラ、トリグリフの比較

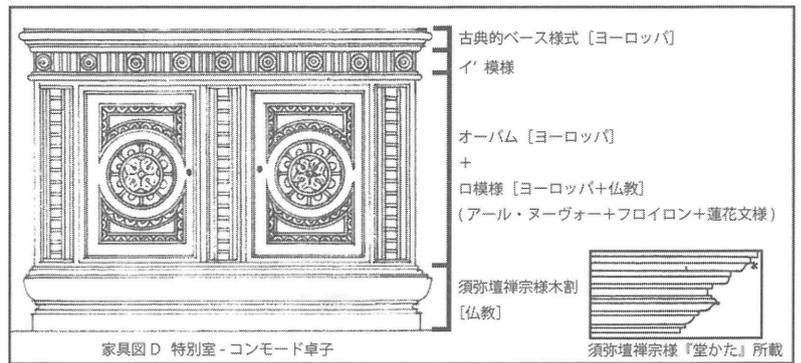


図6 コンモード卓子の意匠構成分析

リグリフと日本の酒杯模様・格子を意図的に混合させた模様ともみえる。(図5)

次にコンモード卓子(図6)について見ていく。土台は須弥壇禅宗様木割に似た構成で、中央の棚扉部分にはオーバムとロ模様を組み合わせた模様が見られる。さらにその上にイ模様を配し、最上部の天板はアストラガルとフィレットで構成され西洋の古典的柱頭によく見られる様式である。一つの家具の中に西洋の古典様式とアール・ヌーヴォー、日本・アジアの古典様式などが複雑に融合している例である。

特別室はアッティカ式古典的オーダーにコリント式植物的装飾を組み合わせた西洋の豊かな古典的表現と日本の和様との融合が特徴である。

3.2 應接室のデザインコード分析

應接室の家具は全8種で、そのうち7種にインド・カルナータカ州寺院のマンダパ(ホール)の円柱^{注4)}



図7 マンダパ

(図7)を彷彿とさせる部分を持つオーダー2(下からフルーティング・オヴォロ・スコティア・フィレット・オヴォロ・アストラガル・オヴォロ・フィレット・スコティアで構成される)が見られた(図2中の家具図Q)。また、オーダー3(下からオヴォロ・フィレット・ハ模様が入ったフィレット・オヴォロで構成される)が3種に見られる。

3.3 会議室のデザインコード分析

会議室の家具は全7種で、そのうち4種に蛇腹模様が見られる(図2中の家具図K)。また2種にオーダー1(下からオヴォロ・フィレット・スコティア・オヴォ

ロで構成される)が見られ³⁾、1種に特別室と同様のアッティカ式オーダーが見られる。「取付ソフワアー」下部には雷文(フリート)模様も見られる。

3.4 小結

3室の家具意匠を比較すると、特別室は日本からアジア、そして西洋の様式が複雑に融合し独特の迫力を醸し出している。また應接室はインドの円柱に通じる部分とフルーティングが組み合わさりアジアと西洋との融合という点で特別室に近い。一方会議室は直線を多用する構成である。つまり会議室、特別室、応接室の順で、部屋の格調が高くなるほど家具のデザイン構成は様々な様式が混ざり合い複雑になっていくといえる。

4 九州大学内の意匠の使い分け

この章では工学部本館特別室・会議室の家具と九州大学内の同時期・同使用目的の家具とを比較し、デザインコードの意図を見出すことを試みる。

4.1 注文書からみる工学部本館特別室木製什器の特徴

2章で述べたように会議室・応接室の2室と比較して、特別室の什器は意匠が古典的かつ複雑な構成であった。家具購入注文書によると、特別室は他の部屋と比較して家具の単価や指定される材料も高い水準であった。特別室は会議室・応接室と比べ、多くの家具について価格が2~3倍ほど高い^{注5)}。例えば「フラワースタンド」という同じ品名の家具の単価は、特別室では一二三円二〇銭、会議室では四六円二〇銭、応接室では四一円八〇銭となっている。また、会議室・応接室・食堂・講堂の「家具材料ハ「オーク」無節上等乾燥材ト」するよう指定されているが、「特別室家具材料ハ上等チーク乾燥材ト」するよう指定している^{注6)}。オーク材に対してチーク材は木目が詰まっていて強靱であること、耐水性が大変高いことから特別室家具に使用された木材の方がより高級なものであったことがわかる。

4.2 特別室デザインコードに関して

特別室は、応接室より格式が高い部屋としてそれとは別に設えられており、天皇や皇族行幸の際利用することを想定して特別な意匠をもって設えた可能性がある。九州大学は明治44年に創設された⁵⁾帝国大学であり、近代天皇制と密接不可分の関係であった。記録によると工学部本館再建前には九州大学に皇族が4回訪れている^{注7)}。特に大正9年に皇太子が九州大学に行啓した際、工学部本館に便殿(行幸・行啓の際の、天皇や皇后をはじめとする皇族の休憩所)を設えたと記されている点は特筆すべきだろう⁶⁾。そして工学部本館再建完了後の昭和24年昭和天皇行幸の際は、工学部本館ではなく向かいの本部第一庁舎に立ち寄ったと記されており、その様子が「天皇陛下御巡幸寫眞幀」⁷⁾に写真として残されている。その写真集の中の、第一庁舎貴賓室に設えられた御座所の写真で確認できるフラワースタンドは工学部本館のフラワースタンドに比べ中央部分はシンプルなデザイン構成であったものの、同じ位置に工学部本館特別室に特有なイ模様が確認された(図8)。

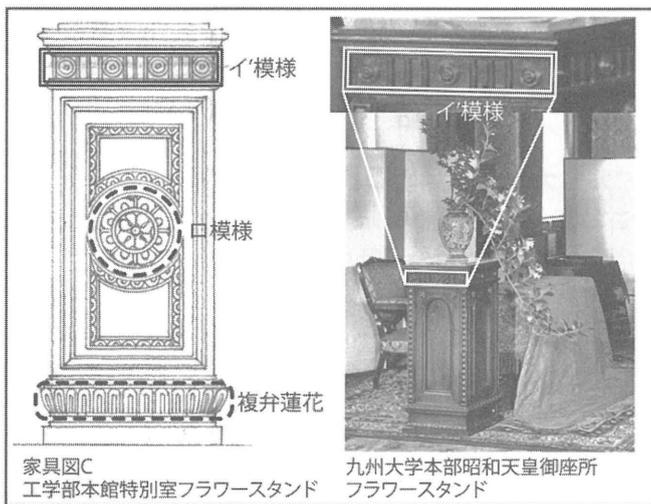


図8 工学部本館特別室と本部天皇御座所のフラワースタンド比較

これにより、おそらく当時九州大学には格調高い特別なデザインコードが存在しており、工学部本館特別室のイ(イ')模様がそれに当たると考えられる。

4.3 会議室木製什器意匠の比較

大正15年竣工の法文学部本館会議室の木製什器は、時期が近いので工学部本館会議室と同じ条件が多く比較対象として適当である。法文学部本館も工学部本館も、椅子の座面下部一周と背面に縦2本のベザントが見られることは共通しているが、法文学部本館は机や椅子の脚部にモールディングが使用されていないため洗練されている(図9)。

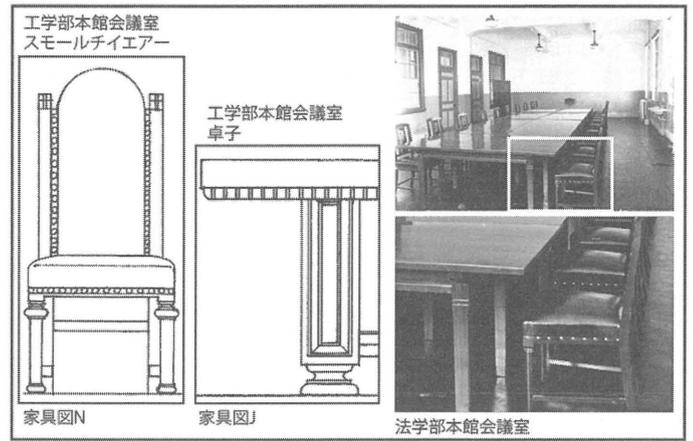


図9 九州大学工学部本館、九州大学法学部本館会議室の比較

5 昭和初期の民間家具との比較

5.1 三河邸家具との比較

九州大学工学部本館木製什器が大阪三越製というのは現存する家具に貼られているプレートからも裏付けることができる⁷⁾。同じように、昭和3年頃に建設された三河家住宅に残された木製什器にも「大阪三越家具製作所」という文字入りのプレートが附されていることが報告されている。三河家住宅は徳島県徳島市にあり、医学博士三河義行が自邸として建設した。鉄筋コンクリート造で、ドイツのユーゲントシュティールから表現派の系譜に至る造形意匠でまとめあげられた特徴ある住宅建築である⁸⁾。

三河家住宅の木製什器の中には、緩く長い曲線で構成される天板湾曲する脚部、植物的装飾を有しユーゲントシュティール調と取れる家具(図10)がある。しかし、脚部にはバーリーシュガー・ターン^{注8)}が多用され、雷文模様や籐製のアジア由来の意匠、すだれ屏風・平安時代の設え家具の厨子棚(図11)などの日本の伝統的家具も混在している。

三河邸の家具脚部の柱頭にカウリクルスや、イ(イ')模様のパテラに似た取手が見られる。またロ模様に似た蓮花文様を彷彿とさせる大きな花模様(図12)も見られた。三河邸の場合はフロイロンの要素はなく、蓮花文様を二重に重ねる構成のためより和様要素が強い。次に雷文模様も共通しており、これも三河邸の場合棚の扉部分に大きく取り付けられていることから



図10 ユーゲントシュティール調曲線 図11 厨子棚 図12 花模

中国の意匠が前面に押し出されているといえる。

5.2 銀座・松屋家具との比較

本研究では九州帝国大学木製什器の歴史的位置付けを試みるため、当時の家具に関する他の資料を参照する必要があるが、現時点ではほとんど整理されておらず、参照可能なものは稀少かつ限定的である。その中でも、昭和13年に発行された「近代家具装飾資料第廿三輯 和洋家具展集 銀座・松屋」は、大阪三越のような百貨店が手がける民間向けの高級家具カタログであり、明瞭な写真が多く研究において比較対象になり得ると判断し、これを取り上げる。このカタログの主題から、当時高級な百貨店家具の中に和と洋を混合させる意匠が存在していたことが伺える。

意匠について分析を行うと、銀座・松屋の意匠は九州大学工学部本館とも三河邸とも異なる。その特徴としては主に2つある。1つ目は材料に竹などが使われており、意匠は緩いカーブに代表されるアール・ヌーヴォーの系譜ととれるものがほぼ全てに見られること。そして2つ目は細い竹や木を組み合わせた意匠が多用されていることである。これはバウハウスのような西洋の近代的意匠と日本の古典的装飾の格子の融合ともとれる。



図13 細く緩い曲線を持つ家具 図14 細い竹を組み合わせた家具

5.3 小結

三河邸、銀座・松屋と九州大学工学部本館の木製什器とを比較すると、共通点としていえるのは西洋・日本・アジアの様式の混在である。さらに細かく見ていくと、九州大学の西洋様式というのはギリシャ・ローマの古典的オーダーであるのに対し、三河邸の場合は17世紀後半に流行したバーリーシュガー・ターン（ツイスト脚）やユーゲントシュティールのことであり、銀座・松屋の場合はアール・ヌーヴォーやバウハウスの意匠である。また九州大学の日本・アジア様式というのは雷文模様・蓮花文様風の花・仏教様式であるのに対し、三河邸の場合は雷文模様・蓮花文様風の花・籐製の家具・すだれ屏風・厨子棚であり、銀座・松屋の場合は格子や竹を用いることである。工学部本館と三河邸では雷文模様と蓮花文様が共通しているがそ

れらは古来からの装飾である。それ以外の意匠の起源は全て工学部本館のものの歴史が古い。

民間建築の三河邸、銀座・松屋がデザイン構成は西洋の近代的意匠とアジアの素材を融合したのに対し、工学部本館特別室の木製什器のデザイン構成は日本～アジア大陸～西洋のデザイン系譜の古典的融合を図ったものであると考えられる。

6 帝国大学内のデザインの違い

6.1 時代背景

当時国家のための建築や大きな民間企業の建築の設計は、帝国大学を始めとする建築学科卒業生によって組織される「官庁営繕」が担っていた。1章で言及した渡部や倉田、他の帝国大学建築課長もこの官庁営繕の一員で、当時の日本建築界最先端の知識・技術を持っていた。この章では、建築設計の権限を持つ人物に共通点がある帝国大学同士の木製什器の比較によって九州大学意匠の独自性を明らかにしていく。

6.2 東京大学安田講堂

大正14年東京大学構内に大講堂および便殿を新築することを目的として安田講堂が創建された。安田講堂に関しては便殿（図15）だけでなく、貴賓及び来賓の控所にあてること目的として設えられた主階控室⁹⁾（図16）の木製什器も確認することができた。安田講堂の便殿は家具だけでなく室内空間も全て古典的装飾がなく、アール・ヌーヴォー風で工業製品を意識した当時最先端のモダンデザインが見られる。

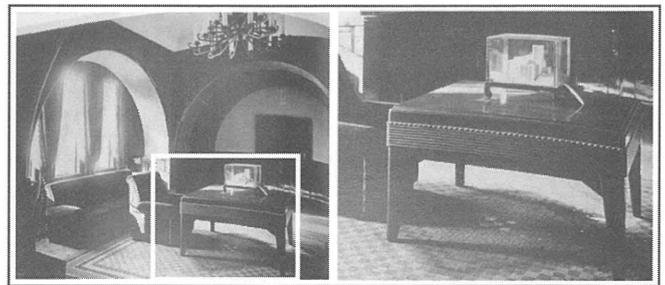


図15 東京大学安田講堂便殿の木製什器

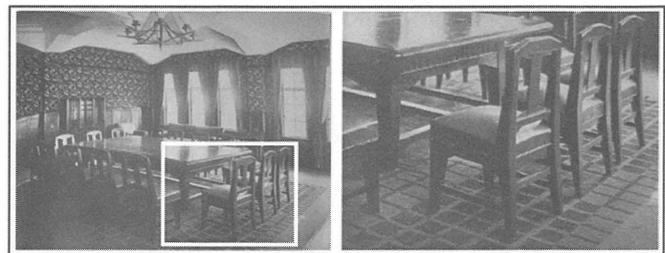


図16 東京大学安田講堂主階控室の木製什器

6.3 京都大学本部会議室

昭和3年の京都大学本部会議室(図17)では、家具の脚部に特に装飾が見られない。

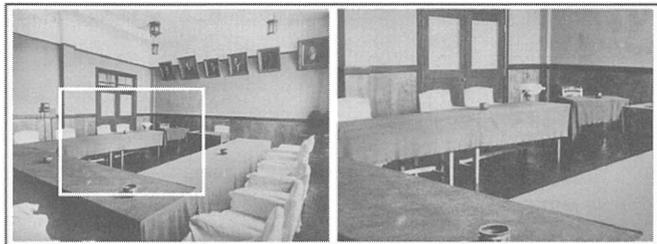


図17 京都大学本部会議室

6.4 東北大学御座所

東北大学には昭和22年に昭和天皇が行幸された時の写真が残されている。その際御座所(図18)で使用されている机の脚部に装飾は見られない

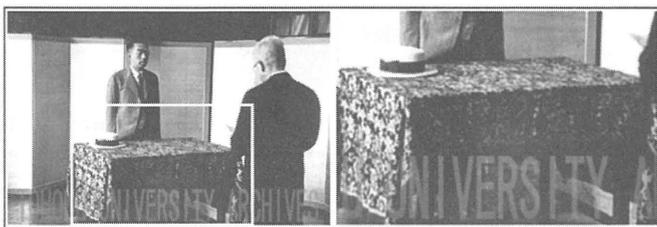


図18 東北大学御座所

6.5 北海道大学中央講堂御座所

北海道大学には昭和7年に三笠宮崇仁親王来学された際設えられた御座所(中央講堂貴賓室)(図19)の写真が残されている。テーブルクロスが雷文模様で縁取られている。またフラワースタンドは二枚の衝立の上に天板が乗る構成で、衝立脚部は花モチーフが透かし彫りされた板の両脇に格子が配されている。またサイドテーブルの脚部も日本の組子の千本格子を彷彿とさせる。

北海道大学御座所は軽やかな和様で統一されおり、伊東忠太を始めとする日本固有様式派の流れを汲んでいるといえる。九州大学工学部本館会議室「取付ソフワアー」下部の雷文模様が共通している。

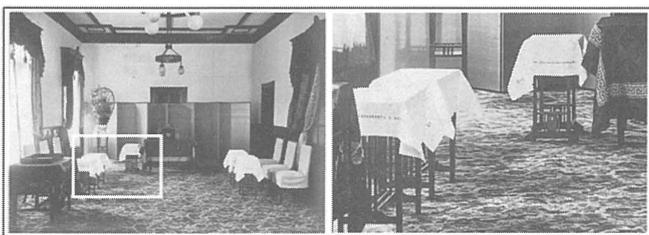


図19 北海道大学中央講堂御座所

6.6 小結

以上の分析により帝国大学の家具設計には、

- ①日本・アジア大陸・西洋融合派(九州大学は格式が高くなるほど日本・アジア・西洋の古典的様式が融合する)
- ②近代モダン派(東京大学・京都大学・東北大学は近代化された抽象的デザインで構成される)
- ③日本固有様式派(北海道大学は和様を中心に構成される)

の3種類に分類されると考えられる。旧帝国大学間で使用目的が同じで同時期に製作された家具にこのような違いが見られることから、当時の帝国大学建築などは国家のための営繕活動的な性格があったが、家具に関していえば国家というより大学の意向を強く反映したのではないかと考える。

7 九州帝国大学の理念

5章では、同時期・同使用目的の木製什器でも大学ごとに意匠の方向性が異なり、特に九州大学は日本・アジア・西洋の意匠の融合という独自性があることを明らかにした。この章ではその独自の意匠を選択した背景について、それらの木製什器が制作されるまでの九州帝国大学の成り立ちを調査し大学の理念を明らかにすることで考察していく。

7.1 九州帝国大学各学部の理念

九州大学において工学部本館が再建される昭和5年より前に創設された福岡医科大学(のちの医学部)・九州大学工科大学(のちの工学部)・農学部・法学部部の創設理念や学術理念について述べる⁵⁾(以下「」内は九州大学五十年史より引用)。

九州大学の創設起源は明治30年、国家として医師の育成が急務であったことが大きく寄与し福岡医科大学設置の勅令が下された。

次に明治44年、九州帝国大学工科大学が設置された。これは東北帝国大学理科大学創立、札幌農科大学創立と同時期だが、九州に特に工科大学が設置されたのは、「明治30年、福岡県八幡には「軍備上ならびに工業上」の必要から日本で最初かつ最大の官営製鉄所が設置され」ていたこと、それに加え「長崎にはわが国最大の民間造船所」があり、「石炭・製鉄・造船は九州の特徴的重要産業であった」ことが大きく寄与していたと考えられる。

続いて農科大学の設置運動も行われた。当時我が国では北海道と東京で先行して農科大学が設置されていたが、「その位置に鑑み北の方、朝鮮、満州および中華民国を対象とする研究と南の方、東南アジア諸国の農業開発の中心として、東京、札幌の農科大学の外に」

九州大学に農科大学を設置する必要性が農学界で強調された。これにより大正8年、九州帝国大学農学部が新たに設置され、日本の中でもアジア・環太平洋圏での研究を先駆けて展開していく^{注9)}。

また大正13年に東北大学と時を同じくして法文学部が新たに設置された。昭和初期は支那哲学・歴史・文学に関わる書籍収集の黎明期にあたり^{注10)10)11)}、のちに九州国際文化協会に発展する。当時日本の研究対象敷地の中心が欧米中心であったにも関わらず、この九州国際文化協会は日本の中で先行して支那を含む広域アジアを研究対象とした¹²⁾。九州大学法文学部の教授たちが日本のアジア文化研究を牽引していたことは想像に難くない。

以上から、九州大学は創建当時、国家増強の目的を担っていたが、国家と大学の成長とともに視線が国内から国外へ向けられるようになった結果、その立地条件から九州大学は特にアジアのための研究機関としての性格を強めていったといえるだろう。

7.2 九州大学内の部局を超えた学術交流

ここでは九州大学内で、部局を超えた学術交流が戦前に盛んであったことを記しておく。

1935年7月に結成された竹帛会(ちくはくかい)は「書籍ノ研究ト愛読趣味ノ涵養並ニ普及発達ヲ図ル」ことを目的としていた¹³⁾。構成員は、九州帝国大学の中国哲学史分野の礎を築いた楠本正継教授¹⁴⁾をはじめとする法文学部教授5名、工学部教授2名、農学部教授1名、そして学外の教養人であった。主な活動は会員の集会、展覧、講演会で、活動を通して異なる分野や立場の人々が交流し、その成果を展示などにより地元還元するという画期的な事業であった。

このことから、箱崎キャンパスという一つの場所に様々な部局が密集していたことが起因して、学内・学外で専門を超えた学術的交流があったことがわかる。

7.3 小結

九州帝国大学創建の理念や工学部本館木製什器が制作された昭和4年の大学の方向性について考察する。

当時は九州大学農学部設立から約12年後で、当時盛んに世界最大規模のアジアにおける生態調査が行われていた時期に当たる。さらに法文学部創設から2年後のことであり、まさに日本を代表したアジアを対象とした文化研究を始める時期であったといえる。九州帝国大学内の各部局で盛んにアジア研究が発展し、その気風は学術交流を通して大学全体に影響を与えていたと考えられる。

以上より、木製什器が製作された当時の九州帝国大学はアジアの研究機関としての自らの性格を強く意

識し、アジアでの研究を大きく展開させていた時期であったといえる。

8 結論

最後に6章の分析結果と7章で述べた九州帝国大学の創建・発展における理念を結びつけて考えてみたい。

東京大学・京都大学・東北大学が世界的最先端のモダンデザインを採用し日本の近代化を牽引しているのに対し、九州大学は最先端とはいえないが、日本だけでなく中国・インドといったアジア大陸、そしてその先の西洋までも包括した独特の古典的な意匠構成を採用している。このことを、九州大学史と併せて考えてみたい。九州大学工学部本館の中で最も格調高く複雑なデザイン構成を有する特別室木製什器には、日本の蓮花文様にも西洋古典的装飾のフロイロンにもアール・ヌーヴォーにも取れる花模様が見られる。一つの模様にも一つの家具にも和と洋の古典的様式・装飾が複雑に融合している。特に蓮花や須弥壇に代表される要素は、昭和期は神仏習合が行われているため日本固有の和様とも取れるが、元は仏教建築由来である。そして九州大学がアジアを牽引する研究機関であるという意識が、教員同士の交流を通じて九州大学の気風全体に影響を与えた可能性は十分考えられる。

本稿で取り上げた木製什器は、大学側の理念が木製什器意匠と結びついていたことを端的に表象しているのではないだろうか。文末に家具発注図の一覧を付した今後の研究の基礎資料としたい。

9 今後の展望

本研究では、昭和初期に建設された九州大学工学部本館の木製什器の歴史的位置付けを目的とし、同年代の九州大学の木製什器や旧帝国大学の同じ使用目的の部屋の木製什器、同年代の民間製木製什器を比較対象とし、意匠に関する研究を行なった。

今後意匠の分析対象を木製什器に加え、室内空間・装飾、更には建築にまで広げることによって分析結果も多くなる。また年代を広げることによって歴史的位置付けの考察内容も深まり、史料価値についてもさらなる展開が可能だと考えられる。特に、今回の調査で工学部本館の模様替えが行われた図面資料も発見されたことは特筆すべきだろう。倉田謙設計の内装を渡部善一が模様替えしていたのである。さらに室内空間と建築を対象とすれば、当時の写真や3Dスキャナーからの分析も可能となる。また、それによって分析対象を別の建物に広げることもでき、さらなる発展が見込める。

また建築史の近代化は産業革命を契機とする社会の変容と密接不可分の関係である。社会の近代化に伴

い産業は機械化され、ものの製造方法・価値観も変化してきた。本研究では言及できなかった木製什器製作の機械化の影響についての研究についても、今後の課題となろう。

本研究では木製什器の意匠を分析することで旧帝国大学大学史について考察を行うことも試みている。他の建築や什器、他大学の建築意匠の分析を通して大学史を別の視点から考えていくことができるかもしれない。

最後に、本研究で取り扱った木製什器は九州大学のキャンパス移転に伴い、取り壊される旧キャンパスに取り残され、一度捨てられた家具たちである。九州大学総合博物館や文書館の皆さんの計らいにより一部救済され、現存が確認できている。現在の日本では経済的な理由などにより地域歴史文化遺産が生き残ることが非常に難しい。今後日本においてヘリテージマネジメント分野が発展することを願ってやまない。

注

注1) 5) より、九州大学の建築学科が設置されたのは昭和29年とわかるが、これは全国の大学の中でも特に遅い部類に入る。

注2) 最終頁の表1

注3) 2) より旅行地名並經由地名

^{ハワイ}布哇, ^{北米合衆國}(米國: サンフランシスコ, シカゴ, ^{ニューヨーク}紐育, ^{フキラテルフィア}, ^{ワシントン}, ^{ボストン}), ^{イギリス} 英國(^{ロンドン} 倫敦, ^{リバープール}, ^{ニューカズル}, ^{エジンバラ}, ^{クラスゴ}), ^{フランス} 佛蘭西(^{パリ} ー, ^{リヨン}, ^{マルセーユ}), ^{ベルギー} 白耳義(^{ブラツセル}, ^{アントワープ}), ^{オランダ} 和蘭(^{ヘーグ}, ^{ロッテルダム}, ^{アムステルダム}), ^{ドイツ} 獨逸(^{ケルン}, ^{フランクフルト}, ^{ハノーフェル}, ^{ハンブルグ}, ^{ベルリン} ー, ^{ドレスデン}, ^{ミュンヘン}), ^{デンマーク} 丁抹(^{コッペンハーゲン}), ^{スウェーデン} 瑞典(^{ストックホルム}), ^{ノルウェー} 那威(^{クリスチヤニヤ}), ^{チェコスロバキア}(^{プラーク}), ^{オーストリア} 奥太利(^{ウキーン}), ^{ハンガリー} 匈牙利(^{ブダペスト}), ^{トルコ} 土耳其(^{コンスタンチノーブル}), ^{ギリシャ} 希臘(^{アゼンス}), ^{イタリア} ヂヤコスラビア(^{ベルグラード}), ^{イタリ} 伊太利(^{ベネチア}, ^{フロレンス}, ^{ローマ} 羅馬, ^{ナポリ}, ^{ミラン}), ^{スイス} 瑞西(^{チューリツヒ}, ^{ベルン}, ^{ゼネバ}), ^{エジプト} 埃及(^{カイロ}, ^{アレキサントリア}), ^{インド} 印度(^{ボンペー}, ^{カルカッタ}), 海峽植民地, 香港, 上海

注4) 神谷武夫: インド建築案内, TOTO 出版, 1996年9月
マンダバが見られるカルナータカ州はインド南部に位置しており、中世寺院の形成期から独自の発展を遂げた地域である。この円柱はろくろから成るといふ説もある。

注5) 最終頁の表2

注6) 九州帝国大学工学部本館家具購入注文書より一部抜粋
一、特別室家具材料ハ上等チーク乾燥材トシ椅子ニハ見本通り金華山織張材料用品ハ總テ上品品ヲ使用シ「スプリング」ハ舶来品トス、「スクリーンパネル」ハ見本通り絹緞子ヲ張ル可シ、「フลาวースタンド」天板ハ大理石入トス總テ圖面通り彫刻ハ手刻トス、原寸圖作製ノ上係官ノ検査ヲ受ケ製作スルモノトス敷物ハ見本通り毛緞通トス

會議室、應接室、食堂、大講堂

家具材料ハ「オーク」無節上等乾燥材トシ椅子及「スクリーン」ニハ各見本通り裂地ヲ張り椅子内部張材料ハ總テ特別室同様上品トス。彫刻ハ總テ手刻トス。

フลาวースタンド天板ハ全部伊太利産大理石入トス。

食堂小椅子ハ皮一枚張トシ下張ハ上等麻製「バンド」ヲ網代張トス「モタレ」升杵ハ「オーク」曲木トシ絶目ナシトス

家具ニ使用ノ金物見エ掛リノ箇所ハブロンズ製ノモノトス

以上總テ原寸圖作製ノ上係官ノ検査ヲ受ケタル上作製ニ取り掛リ材料モ検査合格品ヲ使用スルモノトス

注7) 折田悦郎: 行幸啓と「お手植え」の銀杏, 『九大広報』15号, 九州大学, pp.17-18, 2000年11月

1度目は大正5年11月12日の大正天皇の来学であり、2度目は大正9年4月7日の皇太子(後の昭和天皇)行啓、3度目は大正11年3月20日の大正天皇皇后の来学、4度目は大正12年5月15日の久邇宮良子女王(のちの昭和天皇皇后)一行の台臨であったとわかる。

注8) イギリスで17世紀後半に流行した挽物細工のねじった脚部

注9) 九州大学総合研究博物館: 九州大学所蔵標本・資料2012, 九州大学総合研究博物館, 平成25年1月
現在九州大学総合研究博物館は、アジア・環太平洋圏などで収集された標本としては世界最大規模を誇るヤドリバエ科標本、ハチ標本を始めとする世界的なアジアの学術標本を多数所蔵している。

注10) 特に、支那哲学史講座の初代教授楠本正継がヨーロッパ留学から帰る途中の昭和4年、文献収集を目的に中華民国の北京に赴き、熱心に収集した近世儒学関係典籍コレクションは国内有数の貴重性を誇る。九州大学文書館所蔵「楠本家資料」の中に収められている楠本正継の留学資料「日本宛書簡」から、楠本正継が大学附属図書館に収めることを目的に北京に滞在し、大学の費用で大量の中国書籍を購入した様子がわかる。

北平(のちの北京)から日本の妻宛の手紙

一九二九年十一月十六日付「・・・北平とまだい、到着の翌日から本屋廻りを始めて暮らし、・・・出費は大学校で買はせるつもりだけれど自分でも少し買ってみたい。・・・」

一九二九年十一月二九日付「・・・書物屋漁りを唯一の目的にしてゐる北平生活に・・・」

一九三〇年一月十五日付「・・・日本金を持って帰るより此好機を利用した方が利口なやり方だと思ひ極力書物を探している。・・・」

一九三〇年二月十一日付「・・・今日七十包の書簡を学校(九大)宛送り出し・・・」

謝辞

本研究を行うにあたり資料を提供していただき、ヘリテージマネジメントをご教示くださった九州大学総合研究博物館三島美佐子准教授、九州大学大学史についてご教示くださった九州大学大学文書館折田悦郎教授、歴史的史料の読解を一から指導していただき九州大学支那学研究に関する知見を賜った九州大学柴田篤名誉教授、九州大学附属図書館史についての知見を賜った九州大学附属図書館企画課企画係長山根泰志様、そして最後に、史料を採すにあたり九州大学大学文書館職員の中村江里さん、江頭実生さん、中村俊郎さん、大谷荘平さんを始めとする九州大学文書館職員の全ての方々に大変お世話になりました。心より感謝を申し上げます。

また論文執筆に理解を示してくださった児野登社長をはじめとする株式会社アーキディアックの皆様にも重ねて感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 新井竜治・三島美佐子：九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題，九州大学総合研究博物館研究報告，第15-16合併号，pp.69-85，2018年3月
- 2) 九州大学文書館所蔵：罷免 本部 自明治四四年至昭和六年
- 3) 西山雄大：九州帝国大学の営繕組織に関する基礎的研究—その沿革と技術職員の構成—，平成24年度九州大学工学部建築学科建築学研究卒業論文梗概集，pp.105-108，2013年
- 4) 土橋泉咲：九州帝国大学の初期RC造建築群に見る近代化の様相，平成27年度九州大学工学部建築学科建築学研究卒業論文梗概集，pp.23-1-4，2016年
- 5) 九州大学創立五十周年記念会：九州大学五十年史，九州大学創立五十周年記念会，1976年11月
- 6) 九州大学大学文書館所蔵：大正9年議事録
- 7) 九州大学大学文書館所蔵：行事日程及び奉迎送の要領
- 8) 徳島県教育委員会：徳島県近代化遺産（建造物等総合調査報告書，徳島県教育委員会，2006年3月
- 9) 東京大学：東京大学大講堂（安田講堂）改修工事報告書，国立大学法人 東京大学，2016年3月
- 10) 静永健：一九三〇年代の九大アジア研究と北京，九州大学附属図書館，令和元年11月
- 11) 九州大学附属図書館広報室：知をつむぐ—九州大学の書物たち，九州大学附属図書館，令和元年11月
- 12) 山本尚史：戦時下九州帝国大学の国際文化事業 九州国際文化協会に着目して，大学史研究，第26号，平成29年12月
- 13) 九州大学百年史編集委員会：九州大学百年史 第6巻：部局史編Ⅲ，九州大学，2017年3月
- 14) 柴田篤：硯水文庫余滴—楠本正継教授と九州大学附属図書館—，中国哲学論集第三十三号抜刷，平成19年12月

図3) フロイロン…オーウェン・ホプキンス著；小室沙織訳：世界の名建築解剖図鑑，エクスナレッジ，2013年8月
蓮華文様…近藤豊：古建築の細部意匠，大河出版，1972年6月

図4) 複弁蓮華…「古建築の細部意匠」
図5) パテラ，トリグリフ…「世界の名建築解剖図鑑」
図6) 須弥壇禪宗様…「古建築の細部意匠」

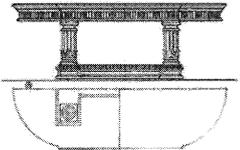
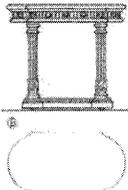
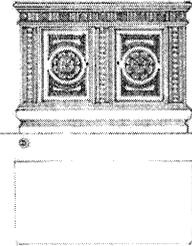
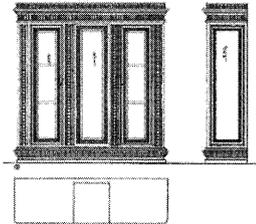
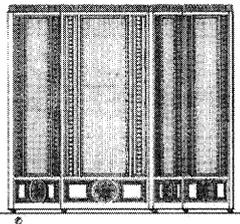
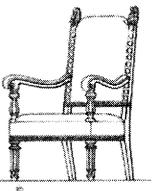
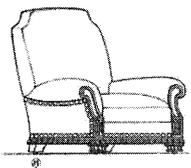
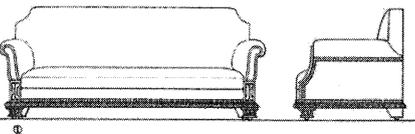
- 図7) 注4)「インド建築案内」
図8) 九州大学文書館所蔵
図9) 九州大学文書館所蔵
なお図の右の写真の撮影時期は不明だが，昭和3年に撮影された写真と同様の家具が確認できる。この写真の方が家具の意匠が確認しやすいためこれを採用した。
図10,11,12) 徳島県徳島市教育委員会提供
図13,14) 高梨勝重：近代家具装飾資料 第廿三輯 和洋家具展集 銀座・松屋，洪洋社，昭和14年1月
図15,16) 9)「東京大学大講堂（安田講堂）改修工事報告書」
図17) 京都大学大学文書館提供
図18) 東北大学史料館提供
図19) 北海道大学大学文書館提供

家具図◎三島美佐子

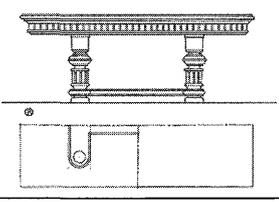
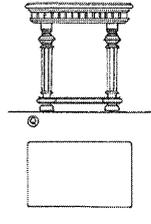
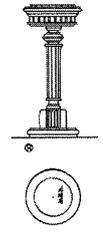
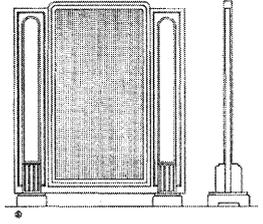
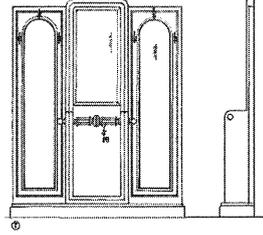
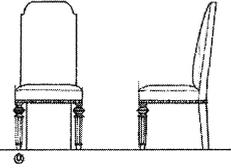
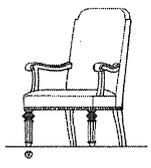
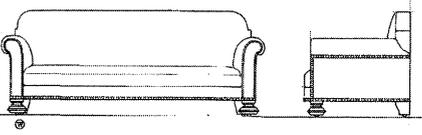
注5) 表2

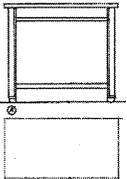
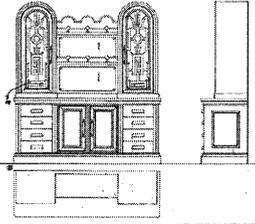
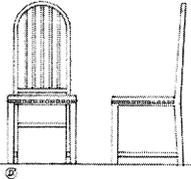
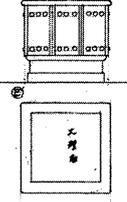
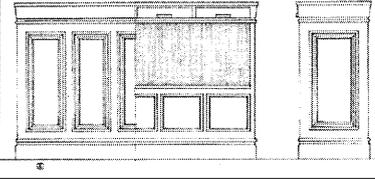
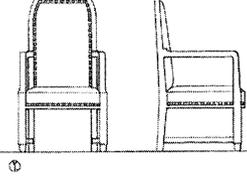
九州帝国大学工学部本館家具供給請負金内訳書（三越大阪支店作成）					単位：圓
室名	品名	数量	単價	小計	計
特別室	センター卓子	一		二六一、八〇	三、九三四、〇〇
	チー卓子	一		七四、二〇	
	フラワースタンド	二	一一三、二〇	二四六、四〇	
	コンモード卓子	二	一三五、三〇	二七〇、六〇	
	キャビネット	一		二七一、二〇	
	スクリーン四枚折	一		二七一、二〇	
	アームチェア	四	六二、〇〇	二四八、〇〇	
	イージチェア	四	九七、六〇	三九〇、四〇	
	ソフワア	一		一五四、〇〇	
	窓カーテン 大	三ヶ所	二二七、六〇	六八二、八〇	
窓カーテン 小	二ヶ所	一三二、七〇	二六五、四〇		
カーベツト	一枚		七九八、〇〇		
会議室	卓子	一六	六八、二〇	一、〇九一、二〇	三、二六六、四〇
	ラウンド卓子	四	三七、九〇	一五一、六〇	
	フラワースタンド	二	四六、二〇	九二、四〇	
	スクリーン	二	六六、八〇	一三三、六〇	
	スモールチェア	五一	一三、三〇	六七八、三〇	
	アームチェア	一		二三、三〇	
	取付ソフワア	二ヶ所	三九一、八〇	七八三、六〇	
	廊下用スタンドハットセルフ	四	七八、一〇	三一二、四〇	
應接室	センター卓子	一		一一三、二〇	七九四、四〇
	チー卓子	二	三八、五〇	七七、〇〇	
	フラワースタンド	二	四一、八〇	八三、六〇	
	スクリーン四枚折	一		五一、七〇	
	スタンドハットセルフ	一		八九、一〇	
	スモールチェア	六	一八、六〇	一一一、六〇	
	アームチェア	二	三四、一〇	六八、二〇	
ソフワア	二	九五、〇〇	一九〇、〇〇		
食堂	卓子	二三	一八、五〇	四二五、五〇	一、七二〇、六〇
	サイドボード	一		二七四、六〇	
	スクリーン	二	六一、〇〇	一二二、〇〇	
	スモールチェア	七八	一〇、二〇	七九五、六〇	
講堂	フラワースタンド	三	三四、三〇	一〇二、九〇	二六四、六〇
	講臺	一		二四二、〇〇	
	アームチェア	一		二二、六〇	
合計					九、九八〇、〇〇

注2) 表1

室	品名	種類	員数	平面図	見上図	立面図	側面図	スケッチ	図面
特別室	センター卓子	A	壹脚	○	○	○			
	チー卓子	B	壹脚	○		○			 Bチー卓子
	フラワー スタンド	C	貳個	○		○			 Cフラワースタンド
	コンモード卓子	D	貳脚	○		○			
	キャビネット	E	壹個	○		○	○		
	スクリーン四枚	F	壹個			○			
	アーム チェアー	G	四脚					○	 Gアームチェアー
	イーじ チェアー	H	四脚					○	 Hイーじチェアー
	ソフワアー	I	壹脚			○	○		
	窓カーテン 大	大	参ヶ所						-
窓カーテン 小	小	貳ヶ所			○			-	
カーベツト	-	壹枚						-	

室	品名	種類	員数	平面図	見上図	立面図	側面図	スケッチ	図面
會議室	卓子	J	老六脚	○	○	○			
	ラウンド卓子	K	四脚	○		○			
	フラワー スタンド	L	貳個	○		○			
	スクリーン	M	貳個			○	○		
	スモール チイヤー	N	五貳脚			○	○		
	取付ソフワアー	O	貳ヶ所			○			
	廊下用スタンド ハットセルフ	O'	四個	○		○	○		

室	品名	種類	員数	平面図	見上図	立面図	側面図	スケッチ	図面
應 接 室	センター卓子	P	壹脚	○	○	○			
	チー卓子	Q	貳脚	○		○			
	フラワー スタンド	R	貳脚	○		○			
	スクリーン 四枚折	S	壹個			○	○		
	スタンド ハットセルフ	T	壹個			○	○		
	スモール チイェアー	U	六脚			○	○		
	アーム チイェアー	V	貳脚					○	
	ソフワアー	W	貳脚			○	○		

室	品名	種類	員数	平面図	見上図	立面図	側面図	スケッチ	図面
食堂	卓子	A'	貳参脚	○		○			
	サイドボード	B'	壹個		○	○	○		
	スクリーン	C'	貳個						
	スモール チイェアー	D'	七八脚			○	○		
	フラワー スタンド	E'	参個			○	○		
講堂	講臺	X	壹個			○○	○		
	アーム チイェアー	Y	壹個			○	○		

(受理：令和2年10月26日)